

澁川一流柔術  
無雙神傳英信流抜刀兵法

# 貫汪館会報

第67号

発行 貫汪館 発行日 平成二十三年四月二十九日  
発行人 森本邦生 広島県廿日市市宮内一四八〇

## 第34回日本古武道演武大会

平成23年2月6日(日) 日本武道館において、第34回日本古武道演武大会が開催され、日本各地より35の流派が集まり演武を披露しました。

本演武会は、我が国の長い歴史と伝統を持つ古武道の「技と心」を保存、伝承及び振興するため、演武会を開催することにより、広く一般に紹介することを目的として開催されています。

今大会が3度目の出場となる我々澁川一流柔術は、森本先生、竹本康祐、竹本治恵、片岡潤一、竹林哲也、濱村多賀司の6名が演武をおこないました。

演武は二部構成からなり、第一部の小笠原流弓馬術を皮切りに各流派が続き、第二部の最後に森重流砲術が演武するまで滞りなく行われました。

各流派とも、その流派を代表する先生方が出場しており、会場を埋める多くの観客の方もその演武に魅了されていました。

今回の澁川一流柔術の演武では、大会直前に演武構成を変更したりしましたが、森本先生御指導下、冷静に対処した結果、大過なく演武を行うことができました。

今回の演武大会に初めて参加された濱村さんに大舞台で演武した感想を寄稿いただきましたので掲載します。

(文責 竹本康祐)

## 第34回日本古武道演武大会に参加して

はじめに、この度は武道館という大舞台に立たせていただきました。森本先生をはじめ竹本師範代、諸先輩方に心より厚く御礼申し上げます。

昨年の春先、先生から今大会の出場のお話を頂いたのですが、その時は、我が耳を疑ってしまいました。と同時に、大会までの時間は長いようで短いので、準備を怠ることのないようにとの御注意を頂き、身の引き締まる思いがしました。

それからは、常に武道館の事を念頭に入れて稽古をしてきました。しかし、大会が近づくにつれて不安が増していき、心の弱さからか動きの本質を離れ、手順や見映えにばかりとらわれるようになってしまいました。

気付いた時には、既に大会まで一月をきっていたのですが、それからは、愚直に肚で動く事だけに集中しました。大会当日、前日に約十年ぶりに乗った飛行機で上京してから文字通り、地に足が着かない状態で武道館に入りました。

控え席で、他流派の方々の演武や、多くの観客や来賓の方々の目の当たりにし、更に緊張したのですが、先生や先輩方が声をかけて下さり、ずいぶん落ち着きを取り戻すことができました。

このとき、ただ家と職場を往復するだけだった自分が、道場でお世話になるようになり、有難いことに武道館にいるという事や、暮れに亡くなった父の事等、直接、演武とは関係ない今までの色々な事を思い返していました。

そして、いよいよ出番になりました。舞台上立ってからは、観客席を見まわすほどの余裕は無く、拙い動きしか出来ないながらも不思議と緊張に吞まれることはありませんでした。満足いく出来では決してなかったのですが、ありのままの自分の実力が出せました。それから、先生と師範代の堂々とした演武を武道館の一番近い位置で見ることが出来、しみじみと光栄に思いました。今大会を通じ今一度、自分というものを見直す良い機会を頂きました。この経験を糧に、一足跳びではなく、一歩一歩、地道な稽古を重ねて参ります。

(文責 濱村多賀司)



## 貫汪館居合道講習会

平成23年3月6日(日)廿日市市立七尾中学校において、貫汪館居合講習会が開催されました。今回の内容は、大森流の「初発刀」「左刀」「右刀」「当刀」「陰陽進退」、英信流表の「横雲」「虎一足」「稲妻」を中心に稽古致しました。

最初に、座姿勢についての説明があり、次いで、斬撃の稽古を行いました。先生からは、「自ら形を作らない」、「刀を振ろうとしない」ということを前提に、正座した時の肘の位置や、斬撃の際の手の内など、いくつかの重要なポイントをご指導頂きました。

私自身、普段刀を扱い慣れてないこともあって、どうしても強く握ってしまう傾向があるようで、何度も先生から御指摘を受けてしまいました。できるだけ力を抜き、刀の重さを感じ、切先に気が通ることを意識することで、最初に比べ、少しは楽に刀を持てるようになった気がしました。

形稽古に入る前には、先生から、「決して抜きつけようとせず、より体を楽にさせること」とのお話があり、その事を頭に置いて稽古に臨みましたが、結局、静から動への瞬間に発する力みがなくなる事はありませんでした。今後の、自分の課題にしたいと思います。

ただ、何度か自然な姿勢ができた瞬間があり、その時は呼吸を深く感じる事ができました。さらに体を楽にさせることで、刀が自然と抜けたような気がします。

今回の講習会で得た感覚を、今後の稽古に生かせるように精進したいと思います。

(文責 西川 朋樹)



## 「広島護国神社奉納演武」

平成23年4月3日(日) 広島護国神社儀式殿において、貫注館の恒例行事である奉納演武を行いました。

今回の奉納演武には、合計24名が参加しました。正式参拝後、広島護国神社 潮瀬宜から、「今年は遅くまで寒さが続きましたがここ数日の暖かさで一気に桜の花が咲きました。異常な気候で始まった年ですが、何をさておき東北地方で発生した未曾有の災害です。被害等は既にテレビ、新聞などでご存知のとおりですが、特に海外から日本人の行動に対し、驚きや感動、賞賛の声が届いています。それは、海外で大きな災害が発生した場合、略奪や殺人等が横行し、無法地帯化することが珍しくない中、今回の被災者の方々は粛々と対応していることです。日本人は、昔から逆境に強く、一致団結してすばらしい力を発揮する民族です。皆さんの稽古している古来からの武術も、そもそもは戦う技であり、換言すればいかに効率よく相手を殺傷するかを追求するものですが、古くから受け継がれた武道の「道」というものの本来の意味は、いかに相手を傷つけず活かすかであり、技を磨くことにより、なるべく争いを起こさず、相手を傷つけないこと、これこそが武道の目的であると思います。葉隠に「武士道とは死ぬ事と見つけたり」と書かれています。その本来の意味は、死に急ぐわけではなくいかににより良く死ぬるか。ということだと考えます。良き死に場所を見つければ、死に急ぐより良く生きるという事です。そういう心を大切に益々の精進して頂くようお願いいたします。

あらためて今回の震災で被害をうけられた方々に、心からお見舞い申し上げます。」とお言葉をいただきました。その後、演武に先立ち、貫注館顧問である岡田先生より「稽古を積む中で大切な事は、技術の向上だけではなく、他人に厳しく鍛えるからこそ、他人に対して優しくする事ができるようになります。皆さん、どうか心の稽古も疎かにしないで下さい。」とお言葉に続き、森本先生より「いつも申しますが、神様の前では誤魔化しは通用しません。見映えを良くしようとか、立派な演武をしようとか考えず、ただ素直な心で演武をするよう心がけて下さい」との、お話しの後、演武を開始しました。

今回の演武で感じたことは、子供達の成長です。前回のように境内を走り廻る事もなく、率先して会場準備を手伝っていました。今後とも大人の方には子供達に技術だけでなく礼儀を厳しく指導していただくようお願いいたします。今回の演武会の感想を上級者の方にお話ししましたので御紹介します。

(文責 濱村多賀司)



## 「護国神社奉納演武会の感想」

今年の演武会当日は少し肌寒かったのですが、演武を行うには全く問題なく最適の気候でした。

今回、子供達の演武はそれぞれが稽古で指導されたことをよく理解をし、古で指導されたことをよく理解をし、稽古の成果が十分に発揮された良い演武であったと思います。私が受けました子供達も、前日まで難しそうにしていたのに、本番では進歩が見られ驚きを受けました。一人の子供は柔術の「難波一捕流 半棒」を演武しましたが、その子は演武を決める時、自分で「難波一捕流 半棒」に挑戦すると決めて(私は本当に難しい形であること話をしましたが)、演武会の日まで熱心に稽古を頑張りました。「難波一捕流 半棒」は大人でも大変に難しい形であるにもかかわらず、こちらの指導するところを素直に聞き入れ、熱心に稽古をしていました。当日は、素直な良い演武ができたと思います。子供達を指導していると、いつも子供の純粋な素直さと柔軟さに見習うところが多いと感じます。そして、それが子供達の上達の早さだといつも感じ、今回の演武会でも一層強く感じました。また、子供達の演武を見る姿勢もきちんと正座をして、私語をすること無く真剣に見ている姿に成長を感じるとともに安心しました。それから、大人の方の演武もそれぞれが今まで指導されたところをよく稽古をし、その成果がでて上達の見られる演武であったと思います。子供達にとっては良い見本となる演武だったのでないでしょうか。

私は今回も柔術と居合の演武をさせていただきました。自分自身で演武を振り返ってみますと、まだまだ心と身体の調和の乱れ、身体の固さが目立つ演武であったと反省をするばかりでした。今回、上條先生のお話の中に「おのおの感じられたことは、もしか

すると神様からの贈り物かもしれない。気づいたことを大切に、今後とも森本先生について稽古してください。」とありました。上條先生がお話されたように今回の演武で気づいたことを大切に、これからの稽古に生かして行きたいとおもいます。また、皆さんも演武を行われてそれぞれが気づいたことがあるとおもいます。その気づいたことを大切に、道場での稽古だけでなく、日常生活での稽古にも生かしていただけたらと思います。

奉納演武会は、森本先生から「本日の演武は、日頃稽古してきたことを大切に、してよく演武できたと思う。大人もそれぞれの課題をよく克服できたと思う。今回の演武で気づいた点は、今後の稽古で指導していくので、そこを超えていただきたいと思う。」との講評をいただき、無事に終わることができました。また、今回大人の方の中には初めてアナウンス等をしていただいた方もおられました。大変に緊張をされたことと思います。本当にお疲れ様でした。今後ともいろいろと宜しくお願いいたします。ありがとうございました。

(文責 片岡 潤一)

